

道徳通信かがわ

第36号

令和元年9月17日（火）

香川県教育委員会事務局

義務教育課

礼儀のもつ力 ー研究推進校 公開授業ー

9月9日（月）、坂出市立白峰中学校で研究推進校の公開授業が行われました。山城紀子先生による、2年生の「秀さんの心」（光村凶書）の授業でした。あらすじは、次のようなものです。

昌雄と久志の二人は「ひかり造園」で5日間の職場体験学習を行うことになりました。二人の指導は、ベテラン職人の秀さんと若手職人の伸さんが担当することになります。秀さんは「造園はきつい仕事だが、がんばればよ。それから職人は常に礼儀に気を付けてほしい」と言って、二人を厳しく指導します。昌雄は早く5日間が過ぎて、口うるさい秀さんのもとから逃れたいと考えていました。

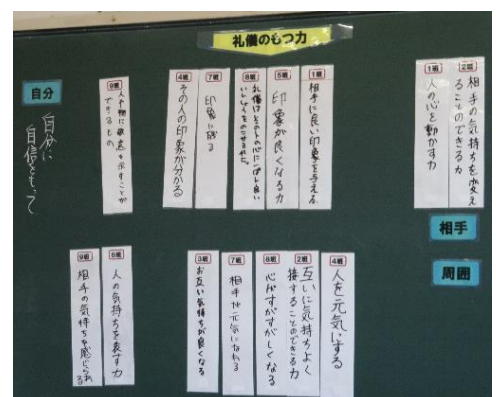
最終日の朝、連日の作業に疲れた昌雄は寝坊してしまい、二人はバスに乗れず遅刻してしまいます。しかし、厳しいはずの秀さんからは「無事についてよかった」の一言。伸さんは「秀さん、最初は怒っていたけど、君たちが事故にでも遭ったんじゃないかと心配していたんだよ」と真相を明かします。秀さんの方を見ると、今から枝を切る木に深くおじぎをしている姿が目に入ります。二人は秀さんの「木に対する礼儀」を知り、胸が熱くなるのを感じるのでした。

白峰中学校では、集会等で体育館に入る際、一礼をして入場するそうです。山城先生は、その時の写真を提示し、みんなはどんな気持ちで一礼をしているのかを問います。実際の自分たちの振る舞いを振り返ることで、秀さんの礼について深く考えるきっかけをつくっていました。

授業中盤では、秀さんと自分たちの礼を比較し、共通していることを赤の付箋紙、違うことを青の付箋紙に書き出しました。班になって付箋紙の内容について話し合っているうちに、生徒たちは、礼儀には目に見える部分（形）と目に見えない部分（心）があることに気付いていきます。

その上で、「礼儀がもつ力」について考えさせました。中学校2年生の生徒にとって難しい課題ですが、班のメンバーと語り合い、自分たちの考えを言葉にしようとしていました。ある班は「相手の気持ちを変える力」を挙げます。すかさず山城先生は「みんなはそんな気持ちになったことある？」と問い返します。これによって、生徒たちは普段の生活と結び付けて「礼儀のもつ力」を再考していきます。このようなやりとりを繰り返しながら、礼儀は、相手や周囲に影響を及ぼすだけでなく、自分自身の心にもプラスになっていることを理解していきました。

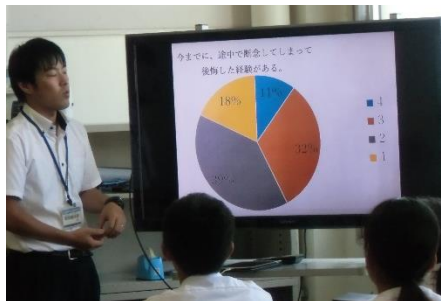
授業最後に山城先生が提示したのは、世界柔道で金メダルを獲得した大野選手の写真です。決勝戦で勝利し、世界一になったのだから本当はうれしいはずなのに、決してガッツポーズなどは見せず、最後まで相手に礼を尽くすその態度から、山城先生は、「礼儀には気を付けているつもりだけれど、どんな時でもできているかと言われると自信はない。大野選手の礼に感動を覚えたのは、そんな自分の弱さを気付かせてくれたからかもしれない」と語りかけます。職場体験を間近に控えた生徒たちにとって、礼儀の在り方を自分事として捉え、多面的・多角的に考える機会となりました。



【礼儀のもつかってどんなもの？】

全教職員でつくる道徳 —協働体制づくり—

坂出市立白峰中学校では、6月13日（木）にも、現職教育の一環で道徳科の校内研究授業を行っています。ここでは学校全体で取り組んでいる「ローテーション道徳」として、各学年1クラスが代表で授業を行い、授業担当以外の先生方で参観しました。



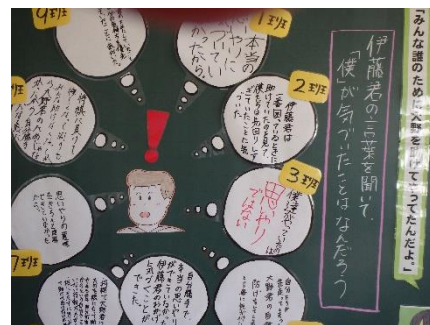
【1年生「ヘレンと共に -アニー・サリバン-」(光村図書)】

ヘレン・ケラーの家庭教師であったアニー・サリバンの立場から、ヘレンが初めてものに名前があることを理解した場面が描かれています。授業者である藤原健太郎先生は、導入で「目標に向かって努力しているか」などを聞いた事前アンケートの集計結果を示し、クラスの実態を明らかにしました。ここで確認したことも基

にして、アニーがヘレンに対し「心を込めて尽くした努力」ができたのはなぜかを考えていきました。生徒の意見を藤原先生自身が傾聴する態度が学級全体の雰囲気として醸成しており、互いを認め合う活発な意見交換ができていました。

【2年生「松葉づえ」(光村図書)】

松葉づえを突いた転校生に最初は親切にしていたクラスメートだったが、転校生が力を発揮し始めると、急に冷たい態度をとるようになってしまったという内容の教材です。授業者の荒岡真衣先生は、「本当の思いやり」とはどういうことか、生徒に実感をもって考えさせようと、班で考えた意見を吹き出しに書かせて黒板に掲示し、思考の可視化を図っていました。



【3年生「あの日生まれた命」(光村図書)】

東日本大震災の当日、娘を出産した母親だが、同時に祖母を亡くしてしまったため娘の誕生を素直に喜べなかった。そんな母親のもとに「希望の君の椅子」プロジェクトから一脚の椅子が贈られる。プロジェクトの意図を知ることによって母親の心が次第に変わっていく、という話です。授業者の塩入奈緒美先生は、母親の心の変化に焦点を当て、様々な視点からヒントを出

しながら、生徒の思考を深めようとしていました。中学生にとって生命にまつわる実体験は少なく、自分事として考えるのは難しいのですが、終末部分では塩入先生自身の体験が語られ、生徒はこれまでと違った角度で「生命尊重」という大きなテーマを捉え直すことができていました。

【校内の協働体制】

白峰中学校は、学期に1回、学年5クラスの4週分の授業を学年団教員で分担してローテーション道徳を実施しています。これによって担任の負担軽減や複数の教師で生徒を見取ることによる評価の妥当性の確保などのメリットを実感しているそうです。このような取り組みを通し、先生方全員で道徳の授業を「共に考え、語り合い」ながらつくり上げているということが、生徒たちにも伝播して、本当の意味で「楽しい道徳」へとつながっていると感じました。



【校内掲示で学習内容を周知】